説教要旨『すばらしいことは、これから』

マルコによる福音書　９章２～１３節

東日本大震災から６年の時が経ちます。努力が報われる日を信じながら、汗水垂らし、歯を食いしばって働き、ようやく辿り着いた今の暮らし。新しい命が誕生し、喜びに包まれていた家族。…そういった一人ひとりの人生や命が、あの震災によって、突然失われていきました。積み重ねてきた人生が、思い描いていた未来が、ある日突然絶たれてしまったのです。そんな出来事が生じる現実世界の中に、私達も例外なく生きていることを突きつけられました。それゆえに、あらゆる絶望的状況においても、なお望みを抱くことのできる確かな拠り所とは何であるのか…改めて重く、深く問われています。

本日の聖書物語には、山上でイエスの姿が変わる場面が描かれていました。イエスの服は、「この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど」に真っ白く輝き、旧約聖書を代表する人物、エリヤとモーセがその場に現れ、イエスと語り合っています。ここには、人間の手では決してつくり出すことのできない輝き、人間の想像をはるかに超えた光景が描き出されています。それを見た弟子のペトロは思わず口にしました。「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」。しかし、その光景はやがて消え去り、弟子達は現実へと引き戻されていきます。そして、イエスは言われました。「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」。山上の光景は、イエスの復活を指し示すものであったことがここで明らかとなります。しかしそれは、イエスの死の出来事を実際に味わい知ってから語り直されるべきだと言うのです。なぜなら、人間のあらゆる可能性が閉じられてしまうかに思える「死」でさえも、新しい命へと導かれる神の支配の中にあることが、イエスの死の出来事を通して明らかにされるためです。

パウロは、「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」（ローマ 8:18）と語りました。またイエスは、「あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。…その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」（ヨハネ福 16:20,22）と語りました。教会は、死を死では終わらせない神の御業を信じ、今のこの悲しみが喜びに変わる時を、地震や津波でさえ奪い去ることのできない喜びに与る時を待ち望んでいます。絶望と人間の限界につまずいている時だからこそ、神において「すばらしいことは、これから」なのだと、なお望みを抱いて生きることができます。そして、その喜びに与った時、「死者の中から復活するとはどういうことか」、その意味がはっきりと示されることでしょう。そして心から、こう叫ぶことができるのです。「私が、ここにいるのは、すばらしいことです！」。

（文責：望月達朗牧師）